

# 乳幼児視力検査-Landolt 環(字ひとつ・単一)視力検査



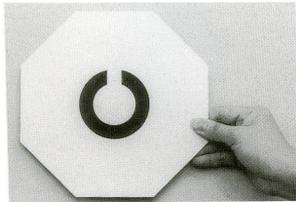
目的

読み分け困難のある幼児に対する視力測定

準備物 ランドルト環字ひとつ視標・ランドルト環の模型



ハンドルを使用した幼児の視力検査  
山下牧子:視能矯正マニュアル P4



字ひとつ視標  
山下牧子:視能矯正マニュアル P4

被検者の眼前で、大きな**視標**(0.1の**視標**)のランドルト環を見せ、答え方の練習をさせる



上下左右の切れ目を指差しさせるか、言葉で答えさせるか、又はランドルト環の**模型**をハンドルのように両手に持たせ車の運転をしてね!などと声かけをして視標の方向と一致させるように回転できるように持ち変える練習もさせる。検査者の動機づけによって可否が決まる要素が大きいが、どうしても出来ない場合、家で練習をしてもらうこと。

目的は何かを考え、片眼にするか、両眼にするか、左右眼どちらを先にするか、決定する



初めての場、練習の意味で視力が良いと思われる眼から測定する機会が多いがケースバイケース。片眼視力を知りたいが、遮閉板やアイパッチをどうしても嫌がる場合、アイパッチに好きなシールを貼る、親も一緒に眼帯する、親の膝にのせ親の手で被検者の片眼をハンカチで押さえる、など色々工夫すること。検査距離も5mがベストだが、集中力が無い場合、2、5mで測定し、見えた最高視力を半分に換算する場合もある。

なるべく背景の白い位置で、**ランドルト環字一つ視標**を提示し、**視標**の方向を変えて大きいものから順にランドルト環の切れ目を答えさせ、答え方により**視標**を飛ばしたり確認したりして順に答えさせる



幼児の場合は比較的提示時間をゆっくりとするが、原則は**2~3秒**とすること。手早くする為、被検者の答え方により確認する視標と省く視標の見極めが大切である。

正解が**半数以下**になった!



注意!

- 必ず上・下・左・右の4方向とし斜めは出さず、1つの視標について縦・横は網羅して次の視標に進むこと。
  - 被検者に方向を変えている途中を見せず、方向を悟らせないようにすること。
  - 被検者の眼の高さに視標を提示すること。
  - 視標カードの持ち方は、体に対していつも同じ持ち方にし、視標の切れ目の位置を悟らせないようにすること。
- 特に幼児の場合**
- 幼児の場合は比較的提示時間をゆっくりとするが、原則は2~3秒とすること。
  - 誉めたり励ましたりして、意欲を持たせるようにすること。
  - 眼鏡枠を嫌がる場合、アイパッチにシールを貼ったりして工夫をすること。
  - 指差しや口答で方向を答えることが出来ない場合、ハンドル法で行うことも考慮すること。

視力は正解が半数以下の1段階上の視標だね。  
3/5以上又は教科書によっては3/4以上としているものもある。



**過半数見える視力が得られるその最小の視標が小数視力値**

結果・記載例)

字ひとつ視力検査  
R.V.(v.d.)=**0.5**  
L.V.(v.s.)=**0.1**まで



視力表なのか字ひとつカードなのかを記載する。飽きたりして集中力がなくなり途中で検査が不可能となった場合、測定できた視力値と、まで、と記載する。  
例) L.V.=0.1まで  
左右差の反応など、視力の手がかりとなるコメントもあれば記載する。